



# ハーレムな夏休み

田舎の美少女従妹と淫らな叔母たち

早瀬真人

挿絵／孤裡精

立ち読み版

## 目次

### Contents

|       |                |     |
|-------|----------------|-----|
| プロローグ | .....          | 4   |
| 第一章   | 美しい叔母からのパイズリ洗礼 | 15  |
| 第二章   | 美熟女たちの乱交の夜     | 54  |
| 第三章   | 筆下ろしは、美叔母の部屋で  | 91  |
| 第四章   | 豊満熟女のまろやかな巨尻   | 157 |
| 第五章   | 美少女の穢れなき秘芯     | 203 |
| 第六章   | つやめく淫蕩の血脈      | 234 |
| エピローグ | .....          | 281 |

## 登場人物

Characters

### 高津 慎也

(たかつ しんや)

都会生まれの、性に興味津々な、どこにでもいる平凡な十歳歳の童貞少年。夏休みを利用して十年ぶりに父方の田舎を訪れる。

### 柿本 留美

(かきもと るみ)

有希恵の娘で慎也の従妹にあたる、清楚で可憐な美少女。水球部所属で、健康的な肢体に黒髪のロングヘアが映える十歳歳。田舎育ちのためか、とても純粋な性格。

### 柿本 有希恵

(かきもと ゆきえ)

慎也の父とは異母兄妹にあたる、お色気たっぷりの未亡人。家を出た兄の代わりに柿本家の土地や財産を守っている。日頃から颯爽と浴衣を着こなす爆乳の三十六歳。

### 柿本 沙紀子

(かきもと さきこ)

有希恵の妹で慎也にとってはもう一人の叔母。離婚して柿本家に出入っている。行動的で活発な性格であり、性にも積極的なセミショートの二十七歳。





## 第一章 美しい叔母からのパイズリ洗礼

### 1

女神の水浴びを覗き見た者は、目が潰れるという逸話を聞いたことがあるが、やはりバチが当たったのかもしれない。

慎也が滝壺から川辺に這いあがったときには、少女の姿は跡形もなく消えていた。

性器を剥きだしにした男が、いきなり空から降ってきたのだから、びっくりしたのは容易に想像できる。

（しかもあつちは真っ裸だったんだから、そりゃ驚いて当然だよな。ああ、覗きをしていたって、わかっちゃったかな）

慎也は嘆息しつつ、全身ずぶ濡れの状態で柿本家に到着した。

門は屋根のついた昔風の造りで、漆喰の塀に囲まれた日本家屋は、どっしりとした佇まいを見せている。

（やっぱり……大きな家だなあ）

敷地面積は、三百坪ほどだろうか。

庭が異様なほど広く、黒艶放つ木造建築が重厚さと威圧感を与えた。

「ご、ごめんください」

引き戸の玄関を開け、遠慮がちに呼びかけると、奥の部屋から着物姿の女性が現れた。

「あら、ひよつとして……慎也君？」

「そ、そうです。有希恵……叔母さんですか？」

「そうよ。ああ、懐かしいわ」

有希恵は黒光りする廊下を、小股で歩いてくる。

流麗な弧を描く細眉、涼しげな目元。唇には赤い紅を差し、一見すると、高級バーのマダムのようなだ。

シニョンの髪型がエレガントな雰囲気醸しだし、洗練された大人の女性をこれでもかと印象づけた。

（お、叔母さん、こ、こんなに……きれいな人だったんだ）

世名木村に来てから、いったい何人の美女に出会ったのだろう。

花びらの模様をちりばめた、薄桃色の着物がよく似合っている。

有希恵が目の前にやってくる、甘い香りとともに、大人の女性だけが持つ仄かな色香が漂った。

（確か、三十六歳だったよな。未亡人のはずだけど、肌も艶々しているし、そんな歳には全然見えないよ）

叔母は、肉づきもかなりいいようだ。

着物の上からでも、ふつくらとした胸の盛りあがり、丸みを帯びた腰の稜線がはつきりと見て取れる。

慎也はしばし惚けた顔つきをしていたものの、熟女の表情が徐々に変化していくのに気づいた。

「ど、どうしたの？ びしょ濡れじゃないの」

「……あつ。そ、それが、ここに来る前に、ちよつと滝を見てきたんですけど、足をすべらせて、その……川の中に落ちちゃったんです」

「まあ、すぐに着替えないと。あ、お風呂に入ったほうがいいかもしれないわね」

「い、いえ、大丈夫です。夏だから、風邪を引くこともないですし」

「沙紀子、ちよつと来て！」

美貌の熟女は慎也の言葉を無視し、廊下の左奥に向かって声をかけた。

（沙紀子？ 沙紀子叔母さん？）

有希恵には、九歳年下の妹がいる。

慎也が沙紀子に初めて会ったとき、彼女はまだ十七歳の高校生だった。

（あれ？ でも、父さんの話では、沙紀子叔母さんは三年前に結婚して、世名木村を出たはずだけど……）

もしかすると、お盆休みで帰省しているのかもしれない。

慎也が廊下の奥を覗き見ると、チュニツクとミニスカート姿の女性が、さも面倒臭そうな顔つきで現れた。

「何よ、そんな大きな声を出して」

「あなただったら、またそんな格好をして。まあ、いいわ。そんなことより、お風呂をすぐに沸かしてくれる？」

「お風呂って、こんな時間から？ あっ」

視線がパチッと合い、沙紀子の頬が瞬時にして緩んでいく。

「し、慎也君？」

「お、お久しぶりです」

猫のようにクリツとした目、すつと通った鼻梁、情熱的な唇。セミショートの髪型

が活発で行動的な印象を与えるも、姉に負けず劣らずの美女ぶりだ。

「大きくなったわねえ。最後に会ったときは、かわいい男の子だったのに！」  
「うわっ」

沙紀子が身を乗りだし、ひしと抱きついてくる。

頬に当たる、まろやかな胸の感触に、慎也は心臓の鼓動を高鳴らせた。

(さ、さ、沙紀子叔母さん、ノーブラ!!)

なんと柔らかくて、心地のいい感触なのだろう。

沙紀子はよほどうれしかったのか、丸々と張りつめたゴムまりのような乳房をグイグイと押しつけてくる。

鼻腔をくすぐる、甘いコロンの香りもたまらない。

全身の血が、一瞬にして沸騰した。

スマートな体型はしていたが、胸が砲弾状に盛りあがっている。

大人の女性らしく、身体つきはかなりグラマーなようだ。

息苦しさを覚えながらも、昂奮した慎也は、みるみる顔を紅潮させていった。

「これ、沙紀子。いい加減にしなさい。慎也君、困ってるじゃないの」

「あ、ごめんなさい」

沙紀子はすぐさま離れたものの、動悸はいつこうに収まらない。

はにかみながら恍惚の吐息を洩らした直後、二人の叔母の背後に、いつの間にか一人の少女が佇んでいることに気づいた。

「慎也君、娘の留美よ。覚えているかしら？」

「あ、あ、あ……」

あまりのショックで、有希恵の言葉が耳に入らない。

目の前にいる女の子は間違いなく、滝壺の近くで泳いでいた、あの美少女だったのである。

## 2

（それにしても、気まづかったなあ）

風呂に入り、夕食を済ませた慎也は、客室に敷かれた布団の上で、留美のことを思い出していた。

びしょ濡れの状態で来訪したことから、滝壺に落ちた男がイトコだったと、美少女はすぐに気づいたようだ。

にこりともせず、すぐさま視線を逸らしてしまった。

食事の時間はひと言もしやべらず、いつ覗き見の事実をバラされるのかと、慎也は終始ヒヤヒヤするばかりだった。

「とにかく……内緒にしてくれて助かったあ」

ホッとしたと同時に、留美の裸体が脳裏に甦る。

まだ硬い線を残した蒼い果実は、溜め息が出るほどの美しさを誇り、乳房とヒップの膨らみが背徳的なエロチシズムを感じさせた。

少女と大人の女の長所を同居させた魅力は、あの年頃の女の子しか出せないのかもしれない。

ふんわりとした乳房、木イチゴのような乳首、股間にうつすらと繁った恥毛を思い浮かべたとたん、海綿体に大量の血液が流れこんだ。

浴衣の中心部が、グングンと節操なく盛りあがる。

テントを張った股間を、慎也は恨めしそうに見下ろした。

(やんなっちゃうな。いつもこうなんだから……)

下腹部の悶々が収まらず、頭の中が排出願望一色に染められる。

全身がカッカッと熱く火照り、このままではとても寝られそうになかった。

「だめだ、いけないよ。他人の家に来て、初日からなんて。しかも……相手はイトコじゃないか」

自身を戒めながらも、右手がデイパックに伸びていく。

中からポケットティッシュを取り出した慎也は、浴衣の帯をほどき、ブリーフをゆつくりと引き下ろしていった。

（ああ、もうビンビンだ）

跳ねあがったペニスは早くも鉄の棒と化し、肉胴には稲光を走らせたような血管が無数に浮きでている。

手のひらで裏茎をそつと撫であげると、甘美な電流が脊髄を駆け抜けた。

「あふっ」

一度火のついた男の性欲は、もう行き着くところまで行くしかない。

慎也はティッシュを左手に、横臥の体勢で剛直を握りこんだ。

（留美ちゃんが、悪いんだよ。そんなにきれいになっちゃうから）

想像の中の美少女に、言い訳がましく語りかけ、勃起を上下にしごいていく。

「ああっ」

よほど気持ちが高まっているのか、性感は緩みなく上昇し、快感の塊が下腹部で風

船のように膨らんでいった。

妄想の世界で、裸の留美が肉幹に指を絡める。

つぶらな瞳でペニスを凝視し、しなやかな指を肉胴に往復させる。

透きとおるような肌は、うっすらと桜色に上気し、微かに開いた唇のあわいから艶っぽい吐息が放たれた。

アーモンド形の目、小さな鼻、さくらんぼのような唇。見目麗しい少女の美貌が、快感をより増幅させ、猛烈な淫情を込みあげさせる。

「はふううっ！　る、留美ちゃん、そんなにおチンチンをいじくりまわしたら、すぐにイッチャうよ。あ、だめ……だめっ」

意識的に指の動きを速め、一触即発の瞬間に血湧き肉躍らせる。

「あ……イクっ、イクっ」

まさに射精寸前、臀部の筋肉を引き攣らせたとたん、慎也の瞳に思いがけない光景が飛びこんだ。

襖が音もなくススッと開けられ、一人の女性が姿を現したのである。

「あつ！　あああああああつ!!」

「あら、ごめんなさい。お取りこみ中だったのね」

「あわ、あわわわわっ……さ、沙紀子叔母さん!？」

ブリーフを慌てて引きあげ、はだけた浴衣の前身頃を合わせる。

沙紀子は目を丸くしたあと、悪びれもせず、そのまま室内に足を踏み入れた。

「ちよっと、お邪魔するわね」

「ど、どうして、声をかけてくれなかったんですか？」

「かけようとしたわよ。そしたら苦しそうな声が聞こえてきたから、うっかり開けちゃったの。うわっ……部屋の中、熱気がムンムンね」

猫目の美女は、口元に微笑を浮かべながら窓際に歩み寄る。

目の前を通りすぎる沙紀子を、慎也は啞然とした表情で仰ぎ見た。

彼女は普段着ではなく、ピンク色のタンクトップとホットパンツを身に着けていた。

サイズが小さいのだろうか、バストの形がくつきりと露あらわになり、張りつめた布地が鼠蹊部に食いこんでいる。

パンツに圧迫された尻肉が裾からはみ出し、まるでババロアのように震えていた。

(あ……あ、な、なんて格好をしてるんだよお)

ノーブラなのか、胸の中心にポッチが浮きでている。

突発的な事態に、いったんは収まりかけていた欲望が、深奥部で再び燃え盛った。

沙紀子は窓を開け放ち、踵を返して近づいてくる。

どうしても、視線がホットパンツの中心に注がれてしまう。

股ぐらに向かって走る放射線状の皺が、このうえなくいやらしかった。

「な、何か……用ですか？」

視線を逸らしながら問いかけると、沙紀子は布団の上に横座りしてくる。

またもやコロンの甘い香りが漂い、慎也はペニスをズキズキと疼かせた。

「久しぶりに会ったから、いろいろ話したいと思ったのよ。だって、夕食のときは何を聞いても、照れ笑いを返すばかりなんだから」

「あ、あのときは……」

「あのときは、なあに？」

留美の裸を覗き見たことで、気まづかったとは言えるわけもない。

欲情を悟られないよう、慎也は体育座りの姿勢で釈明した。

「つ、着いたばかりで、その……緊張していたので」

なんとかごまかそうとするも、沙紀子は含み笑いを洩らした。

「そうだったの。まあ、いいわ。で、この村の印象はどう？ 聞きたいことがあったら、何でも言つてちょうだい」

「うーん、あ、そうだ。この村って、女の人がすごく多いんですね」

「ふふっ、今の村の人口は二百人ほどなんだけど、八割以上は女かな」

「そ、そんなに!？」

「女系家族って、言うのかな？ どこの家でも女の出生率が高いのよ。しかも男の人は村を出たり、長期間出稼ぎに行ったりで、だから自然と女が多くなっちゃうの」

「な、なるほど。そうだったんですか」

「最近では、集団お見合いで婿養子を取るケースが増えてるんだけど、場所が場所だけに、なかなか成婚までではこぎつけられないみたいだわ」

「たとえ大自然豊かな場所でも、そこに住む人たちにとっては、それなりの悩みや苦労があるようだ。」

「でも、沙紀子叔母さんは結婚したんですよね？」

「私は高校を卒業したあとに村を出て、大学で知り合った先輩と結婚したの。今は、離婚しちゃったけどね」

「え、えっ？ そうだったんですか!？」

「すごく頼りない人だね。性格の不一致ってやつかな。今は町にある、友人のブティックを手伝いながら婚活の最中よ」

結婚生活などまだまだ先の話だが、赤の他人同士がひとつ屋根の下で暮らすのだから、やはりいろいろあるのだろう。

慎也が納得げに頷くなか、今度は沙紀子が質問を投げかけてきた。

「慎也君の家族は、みんな元気でやってるの？」

「え、ええ。元気です。父と兄は、ボストンに行ってますけど」

「そうですってね。あなたのパパ……私にとっては腹違いのお兄さんだけど、もう全然会ってないから」

「あの……」

「何？」

「父は、十年前から一度もこちらに帰ってきてないんですか？」

「そうよ。忙しい人なんだし、仕方がないわ。でも、私の結婚式のときは、祝電とご祝儀を送ってくれたのよ」

初耳だった。

この十年、父や母から柿本家の話はほとんど出なかった。

両家のあいだで、何かトラブルがあったのかと勘ぐったこともある。

(それだけに、今回の父さんと母さんの言いつけは、すぐく意外だったんだよな)

沙紀子の話を聞いた限りでは、決してわだかまりがあるとは思えない。

やはり父は、母と結婚したいがために東京に残り、柿本家の後継者を長女の有希恵に譲ったと考えるのが妥当だろう。

慎也が独り合点していると、いつの間にか、沙紀子が目と鼻の先に迫っていた。

条件反射とばかりに、くつきりとした谷間を刻んだバストの膨らみに視線を向けてしまう。

(ああ、すごいおっぱい。柔らかかそうで、ふるふるしてるよお)

手をちよつと伸ばせば、女性の乳房に触れられるのである。

生唾を呑みこんだ瞬間、沙紀子はさらに身体をすり寄せてきた。

「ふふっ。今、慎也君が何を考えているか、わかるわよ」

「え、え？」

少年の欲情など、先刻お見通しなのか。

果実臭の息が頬にまとわりつき、慎也は心臓の鼓動を一気に跳ねあがらせた。

「お父さんが、なんでこの村を出ていったのか、考えているんでしょ？」

「へ？ あ、え、ええ。そ、そうです！」

安堵に胸を撫で下ろすも、股間の逸物はパンツの中であらぬ方向に突っ張り、激し

痛みを感じる。

下腹部を隠すように腕を下げると、沙紀子は意味深な笑みを浮かべた。

「知ってるの？」

「は？ な、何をですか？」

「お父さんが村を出ていった……本当の理由」

慎也は一瞬きよんとしたあと、徐々に眉を顰<sup>ひそ</sup>めていった。

(やっぱり、他に何かあるんだ)

おそらく、子供には言えない事情があったのだろう。

「知りたい？」

「し、知りたいです！」

思わず身を乗りだしたとたん、沙紀子はなぜか瞳をしつとりと潤ませた。

「ふふっ。じゃ、ヒントをあげるわ」

「ひっ！」

白魚のような指が、股間の頂に絡みつく。

驚きの声をあげた慎也は、仰け反って布団に倒れこんだものの、美しい叔母は素早い動きでのしかかってきた。

「ま、待って！ これのどこがヒントなんですか!？」

「そんな大きな声を出したら、お姉ちゃんや留美ちゃんに聞こえちゃうわよ」  
こんな姿を有希恵に見られたら、問答無用で柿本家を追いだされかねない。

我に返った慎也は、襖の向こう側に神経を集中させた。

身体を強ばらせている隙を突かれ、股間に伸びてきた両手がブリーフを素早く引き下ろす。

怒張が扇状に翻った瞬間、童貞少年は心の中で（あつ！）という悲鳴をあげた。

「ずっと、おチンチンを勃たせているの、知ってたんだから」

「な、何をするつもりなんですか？」

「あら、途中で邪魔しちゃったから、お手伝いしてあげようとしてるんじゃない」  
「お手伝い」という言葉が、甘美な響きとなって鼓膜に届く。

全身の血液が沸騰し、裏茎にはみるみる強靱な芯が注入されていった。

「まあ、包茎おチンチン！ かわいいわあ」

沙紀子は熱い溜め息をこぼし、手のひらで陰囊をやんわりと撫であげる。  
とたんに下腹部が浮遊感に包まれ、慎也は背中をゾクゾクさせた。

「はああつ、そ、そんな!？」

「大丈夫よ。数をこなしていけば、遅くなるから」  
「い、いや、そういう意味じゃ……あ、ふううううっ」

慎也は布団から頭をもたげ、目を大きく見開いた。

沙紀子が唇を窄め、真上からペニスに大量の唾液を滴らせたのである。  
夢を見ているのではないかと思った。

相手は血の繋がった叔母なのだ。

妄想の世界ならまだしも、現実となると、さすがに困惑は隠せない。

「我慢できる？」

「え、え？」

「童貞君でしょ？ 我慢できそうかって聞いているの」

異性とはキスどころか、手さえ繋いだこともなく、すべてが未知の体験なのである。  
何も答えられず、ただ呆然とするなか、沙紀子は年上の女性らしく、優しい口調で  
言葉を連ねた。

「両足を一直線に伸ばして、下腹に力を入れて」

「こ、こうですか？」

言われたとおりの姿勢をとると、猫目の美女はペニスを握りこんだ指に力を込める。

そして口元に淫蕩な笑みを浮かべ、包皮をゆつくりとズリ下げていった。

「あ……あ……あ」

「我慢するのよ」

沙紀子の目論見を察した瞬間、慎也は脳漿が沸騰するような昂奮に目を剥いた。

これまであらゆる淫らな妄想で、数え切れないほどのオナニーを繰り返してきたが、異性からの包茎矯正など考えたこともない。

あまりにも刺激的な美女の行為に、剛直は一段と激しくいなないた。

### 3

勃起に熱い視線を送る沙紀子を、慎也は熱っぽい顔つきで見つめた。

手のひらを通し、ペニスに彼女の体温がじかに伝わってくる。

ふつくらとした柔らかい感触に、ただ触れられた状態でも男子の本懐を迎えそうだった。

「ふふっ、おチンチンの皮、たっぷりと剥いてあげる」

「はふっ」

美女の口から卑猥な言葉が放たれ、睾丸の中の精液が暴れまわる。

「だめよ、まだイッチャ」

さすがは元人妻だけに、射精の兆候は熟知しているようだ。

沙紀子は根元を指先でキュツと絞り、精液の噴出を強引に制した。

「あ、くうううううっ」

「どう？ 収まった？」

目尻に涙が溜まり、荒い吐息が間断なく放たれる。

今や少年は、経験豊富な美女の手のひらで転がされているようなものだった。

凄まじい性的昂奮と期待感に胸が打ち震え、解剖されたカエルのように両足がひくついてしまう。

「あぁん、すごいエッチなお顔……たまらないわ。いい？ 私がいいって言っただけで、出しちゃだめだからね」

沙紀子は念を押し、包茎矯正を再開させる。

「あ……あ、あぁ」

慎也は全身を硬直させたまま、瞬きもせずにペニスを凝視した。

亀頭の先端が、ひとつ目小僧のように自身の顔を睨みつける。

頭頂部は先走りの液と唾液で、ヌルヌルの状態だ。

慎也は足の爪先を内側に湾曲させ、内腿に小刻みな痙攣を走らせた。

極限にまで膨張した雁首に、パンパンに張りつめた包皮がとどまっている。

「ほら、もうちよつとで剥けそうよ」

ほくそ笑んだ沙紀子が指を下方にずらすと、やや厚めの皮がぐるんと反転し、真っ赤に染まった亀頭部がさらけ出された。

「は、はあああああああつ！」

同時に快感電流が脳天から突き抜け、腰が小刻みにバウンドする。

「我慢よっ！ イッたら、お仕置きするからね」

慎也は奥歯を噛みしめ、懸命に射精の先送りを試みた。

勃起がブンブンと頭を振り、鈴口から前触れの液がじわりと溢れだす。

首筋に青白い血管を浮かべ、ひたすら放出を堪える姿を、沙紀子は舌なめずりをしながら見つめていた。

「は、はあ、ふうううっ」

「大丈夫？ まだ我慢できそう？」

「は、はい」

息を小さく吐きながら答えたあと、慎也は違和感のあるペニスに目を向けた。

ズル剥けた包皮が雁首の下を締めつけ、ジンジンと疼くような搔痒感が走り抜ける。それでも、勃起は少しも萎えない。

生まれて初めて味わう感覚に不安を覚えつつも、昂奮度はますます高みを極めていった。

「痛みはどう？」

「ほ、ほんのちよつとだけ」

「皮が伸びきるまで、もうちよつと辛抱して。大人の男なら、みんな皮は剥けているものなんだから」

言わずもがな、その程度の知識は友人たちから仕入れている。

早く大人になりたいという思いから、自分でも包茎矯正に挑戦したことはあるのだが、パンツにこすれた包皮が元に戻り、いつも失敗ばかりを繰り返していたのだ。

「慎也君がこの村を出る頃には、おチンチンの皮が、ちゃんと剥けているようにしてあげるわ」

「は、はあっ」

全身の細胞が、歓喜に打ち震えた。

叔母の言葉は、これからもまだ淫らな行為があることを意味している。

もはや、血の繋がりがあろうと関係ない。

美しい年上女性との初体験は、夢にまで描いたシチュエーションだったのだ。

(ああっ！ 沙紀子叔母さん、このあとは何をしてくれるの!?)

胸が締めつけられるように苦しく、まともな息継ぎができない。

切なげな顔で次の行為を待ち受けていると、沙紀子はペニスから手を離し、タンクトップの裾を両指でつまんだ。

「私、ぎりぎりまで我慢している男の顔を見るのが好きなの。お口でしてあげてもいいんだけど、すぐにイッチャつたら、つまらないでしょ？ 手も刺激が強すぎるだろうし……」

そう言いながら、ピンクの布地がたくしあげられていく。

(あ、あああああっ!?)

ブルンと弾けてた乳房は、丸々と張りつめ、前方にドンと突きだしていた。

身体の線が細いせいか、凄まじいばかりの巨乳に見える。

まるで、小玉スイカをふたつ並べているようだった。

眼前に晒された生乳のまろやかさ、悩ましげに揺らめく甘い匂いに胸が騒いだ。

(お、おっぱいもすごいけど、なんていい匂いなんだ)

内にももついていた汗と甘酸っぱい芳香が立ちのぼり、鼻腔粘膜から脳幹まで、光の速さで突っ走った。

「今までは、どんなことを考えてオナニーをしていたのかしら？」

口の中がカラカラに渴き、言葉がまったく出てこない。

焦らしのつもりなのか、沙紀子は次々に刺激的なセリフを言い放った。

「やっぱり、おマ○コのことばかり考えていたの？ それとも、おチンチンをたっぷりとしやぶつてもらおうことかしら？」

「あ、ああああっ」

なんていやらしい言葉を投げかけてくるのだろう。

白い溶岩流が腹の奥で怒濤のように荒れ狂い、尿道口が自然とひくついてしまふ。身をよじり、会陰を引き締める少年の姿を、ふしだらな叔母はさもうれしそうに見

つめていた。

「ふふっ、私がこれから何をすると思う？」

「わ、わ、わかりません」

「さて、今まで想像したことがあるかな？」

沙紀子はタンクトップを頭から抜き取り、両手を乳房の側面にあてがう。そして弾み揺らぐ双乳を、滾る牡の肉に寄せてきた。

（あ、あああつ、パイズリだっ!!）

半年ほど前、友だちから借りたアダルトビデオで観賞したことがある。

パイズリの知識がなかっただけに、最初は驚かされたが、男優の喘ぎ声を聞くたびに、そんなに気持ちがいいのかと、興味津々の眼差しを注いだものだ。

もつとも、童貞の自分には実現性の低いプレイで、いつか経験するにしても、遠い先のことだと思っていた。

それが、キスやフェラチオ、クンニリングスを一気に飛び越して体験できるのだ。

（し、信じられないよ……ホ、ホントに俺がパイズリを!!）

半信半疑で待ち受けるなか、胸の谷間に挟まれたペニスは、瞬く間に両の乳房に呑みこまれていった。

「は、はふううううっ」

しっとり汗ばんだ乳肌が、上下左右から勃起を包みこむ。

もちもちとした感触と弾力感が、なんとも心地いい。

「どう？ おっぱいなら、そんなに刺激も強くないでしょ？」

頭の中で白い光が明滅し、沙紀子の言葉が耳に入らない。

慎也は惚けた表情で、早くも虚ろな視線を宙にさまよわせた。

叔母が窄めた唇からまたもや唾液を滴らせ、乳房と肉筒の隙間にすべりこんでいく。そして両手に力を込め、上半身を上下に揺らしながら、勃起を揉みこんでいった。

「あ……ぐうっ！」

マシユマロのような柔肌が、肉胴にびったりと張りつき、苛烈な刺激を与える。

スライドのたびに、亀頭の先端が胸の谷間からひよっこりと顔を覗かせ、熟したトマトのような色合いに変化していった。

（こ、これで、刺激が……少ないの？ 気持ちよすぎて、頭が変になりそうだよお）  
ピストンが徐々にリズムミカルになり、双乳のあわいから、ニツチャニツチャと淫らかな音が洩れはじめる。

上目遣いに様子をうかがう叔母の顔が、やたらみだりがましく、猛烈な淫情を催させた。

「はひっ！ はひっ！」

沙紀子はパイズリを繰り返すあいだ、唾を何度も真上から滴らせる。

妖しく光り輝いていくペニスは、赤黒く膨張し、これ以上ないというほど張りつめ



ていった。

いびつに形を変えるバストも、今や唾液と先走りの液でヌルヌルの状態だ。なんて柔らかくて、気持ちがいいのだろう。

ふわふわの乳肌は今やペニスに同化し、亀頭から根元までをまんべんなくこすりあげていた。

「あつ、ふうううううつ」

我慢をするにも限度がある。

慎也は上ずった声を放ち、腰を女の子のようにくねらせた。

童貞少年にとってはすべてが初体験、扇情的な行為の連続なのだ。

「ふふっ、気持ちいい？」

「ああ、気持ちいい、気持ちいいですっ！」

「慎也君のおチンチン、ドクドクいつてるわよ。そろそろ限界かな？」

「は、はい！ も、もうイッチャイそうですっ!!」

大量の唾液が潤滑油の役目を果たしているのか、乳丘のなめらかな感触が肉胴に走り抜ける。

ペニスはまだ膨張を続けているようで、反転した包皮がさらに雁首を締めつけた。

亀頭部が鬱血し、肉棒全体がじんじんと疼きだす。

尿道口から、透明な粘液がピュッピュッとしぶく。

「先っぽがパンパン。じゃ、そろそろイカせちゃおうかな」

「はふっ、はふっ」

「いい？ たっぷり出すのよ」

全身の筋肉を引き攣らせた瞬間、沙紀子は双乳を互い違いにスライドさせた。

上下のピストンにイレギュラーな動きが加わり、きりもみ状の刺激をペニスの側面

から芯へと注ぎこむ。

「あ……あ……あ、あああああああつ」

慎也は尻上がりの声を発し、軟体動物のように身体をくねらせた。

童貞少年のちっぼけな自制など、もはや何の役にも立たない。

快樂の高波は、あつという間に理性を根こそぎ呑みこんでいった。

ぶるんぶるんと弾み揺らぐ乳肌が、肉棒をこれでもかとしごきあげる。

絶頂感が波状に襲いかかり、心臓が痛いくらいに暴れる。

「イキますっ！ イッチやいますっううううっ!!」

慎也が咆哮した直後、灼熱の溶岩流は輸精管を猛烈な勢いで突っ走った。

包皮の締めつけに遮られた樹液が、反動をつけ、打ち上げ花火のように噴きあがる。第一陣はびゅるんと、沙紀子の頭上まで跳ね飛んだ。

「きゃあああつ」

「う、くっ！」

性欲旺盛な少年の吐精は、一度限りでは終わらない。腰をしやくるたびに、二発三発四発と、濃厚なザーメンを次々と天高く舞い散らせた。

「いやんっ、まだ出るの？ すごいわぁ」

牡のエキスは放物線を描き、はち切れそうな乳丘に降りそそいでいく。

肌色の乳房はみるみる白濁に染まり、蛍光灯の光を反射し、妖しいまでの照り輝きを放った。

七、八回は、脈動しただろうか。

放出がストップすると、沙紀子は乳房を小刻みに揺すり、ペニスを根元からゆつくりと絞りあげた。

「きゃんっ!!」

尿管内の残滓が、ひと際高く跳ねあがる。

睪丸に溜まった精液を、ありったけ放出した慎也は、ぐったりとした顔つきで布団

に沈んでいった。

「やっぱり……若い男の子って、すごいわ。こんなにたくさん出すなんて。あぁん、おっぱいが精子でベトベト。またシャワーを浴びなきゃ」

沙紀子が満足そうな笑みを浮かべ、タンクトップを手に立ちあがる。

もちろん彼女の姿は慎也の視界には入らず、ただ恍惚の表情で官能の海原をたゆたっていた。

「あ、そうそう。明日の夜の十一時頃、この部屋の窓から外を見てごらんさい」  
立ち去り際、叔母が耳元で囁きかける。

耳奥には届いたものの、思考がまったく働かず、言葉の意味を理解できない。  
慎也は仰向けの状態で、ひたすら荒い吐息をこぼすばかりだった。

4

長旅の疲れと大量射精のためか、慎也は翌日、午前十時近くに目覚めた。

柿本家には初老の男性一人、女性二人の使用人がいて、世名木村ではやはり権威のある名家だということがわかる。

留美たちはすでに食事を済ませたようで、慎也は女中が運んできた遅い朝食に箸をつけたあと、散歩がてら、家の周囲を歩いてみた。

(それにしても、昨夜はすごかったなあ)

意識せずとも、沙紀子のパイズリが脳裏をよぎる。

柔らかい乳肌と生温かい唾液の感触に、ペニスはもちろんのこと、脳髓まで蕩けそうだった。

田舎生活の初日から、年上の美女相手に過激な体験をしたのである。

好奇心旺盛な少年が、さらなる期待に思いを馳せるのも無理はなかった。

(沙紀子叔母さん、今度はもつとエッチなことをしてくれるかもしれないぞ)

思わず口元をほころばせた直後、今度は留美の顔が浮かんでくる。

昨夜は有希恵と沙紀子がいたため、謝罪らしい謝罪はできなかった。

彼女にはきちんと事情を説明し、頭を下げておかなければ、どうにも気持ちが悪く落ち着かない。

(あと二週間も、この村に滞在するんだもんな。留美ちゃんと、顔を合わせないわけにはいかないし……)

重厚な造りの蔵を見上げた慎也は、裏手の方角に足を向けた。

「確か……こつちのほうに、小さな池があつたはずだ」

その池は、十年前に世名木村を訪れたとき、留美と虫取りをした場所だった。

(そうだ。あのときは兄ちゃんが熱を出して、母さんがつきつきりで看病してたから、俺はずっと留美ちゃんと二人で遊んでいたんだっけ)

過去の記憶が、鮮明に甦ってくる。

虫取りの最中、留美は突然草むらの中に姿を消し、慎也は何事かとこつそり覗きこんだ。

瞳に飛びこんできたのは、かわいい白桃のようなお尻で、彼女はしゃがみ込んだ体勢で用を足していたのだ。

悲鳴をあげた少女の顔は、今でもはつきりと覚えており、慎也にとっては強烈な印象を残した場所でもある。

林の中の細い道を五分ほど歩いていくと、目の前が開け、お目当ての小さな池が現れた。

(ここ、ここだ……あっ!!)

池のほとりに、一人の女性が佇んでいる。

白いワンピースを着た黒髪の少女は、紛れもなく留美だった。

(な、なんで彼女も来てるんだ?)

やや困惑したものの、謝罪するには絶好の機会である。

慎也は深呼吸をしたあと、留美のもとにゆつくりと近づいていった。

「……あつ」

肩越しに振り返った美少女は、ハツとし、気まずそうに頬を強ばらせる。そして、みるみるうちに目を紅潮させていった。

「や、やあ」

照れ隠しに頭を掻きながら近寄れば、留美は視線をサッと逸らす。

慎也は間髪をいれず、覗き見行為の謝罪と釈明をした。

「き、昨日はごめんね。びつくりしたでしょ? 川の音が聞こえたから、喜び勇んで上の道から覗いたんだ。まさか留美ちゃんが、その……いるなんて思ってもみなかったから」

少女は何も答えない。唇を引き結び、ただ俯くばかりだ。

「こ、こつちも、すぐく驚いてさ。それで、足をすべらせちゃって……」

「……いいの。あんな格好で泳いでいた私が悪いんだから」

留美は、ようやく口元に微笑を浮かべる。

年頃の女の子が、オールヌードを同年代の男子に見られたのである。

恥ずかしいのは、当然のことだろう。

(ポコチンも見られちゃったのかな？ 恥ずかしいけど、ちゃんと聞いておかないと。これからの対応も変わってくるわけだし……)

そう考えた慎也は、ためらいがちに問いかけた。

「あの……ひよっとして見た？」

「え？」

「俺が、その……落ちるところ」

質問の意図がわからなかったのか、留美はきよんとした顔をしている。

「ううん、滝壺のほうからすごい水音がして、それで誰かが落ちてきたんだとわかったの。だから、落ちてくるころは見てないわ」

「そ、そう。ホントにごめんね」

どうやら、性器を露出していた姿は見られなかったようだ。

今度は深々と頭を下げると、彼女はか細い声で言い放った。

「まさか、二度目も……慎也君に見られるなんて」

「え？」

しばし唾然としていた慎也は、次の瞬間、目を見開いた。

（る、留美ちゃんも、お尻を見られたことを覚えていたんだ！ ひよつとして、この池に来たのも、俺と同じように強烈な思い出として残っていたからじゃ？）

留美の顔が、首筋までピンク色に染まる。

やがて俯いたまま、ぼつりぼつりと言葉を紡いだ。

「死んだおばあちゃんにね……物心がついたときから……ずっと言われていたの。あの……するんだよって」

「え？ 何？」

最後のほうのセリフは、あまりにも小さくて聞き取れない。

慎也が聞き返したとたん、美少女は首を逆方向に振り、震える声で答えた。

「初めて、お尻を見られた男の人と結婚するんだよって」

祖父の後妻が死んだのは、彼女が四歳のときだったはずだ。

その教えをいまだに信じているとは、なんと純粋な女の子なのだろう。

（そうか。ということ……俺は十年越しに、二回続けて留美ちゃんのお尻を見ちゃったのか）

驚きとともに、喜悦が込みあげる。

他の男に臀部を見られた経験がないということ、留美はバージンに違いない。穢れを知らない美少女が、天使のように思えてくる。

その一方で、結婚という二文字に、慎也は心臓をドキドキさせていた。

亡くなった祖母の言いつけを守るなら、自分は彼女と結ばれることになる。

これまでまったく意識することのなかった、異性との二人だけの甘い生活。留美と寄り添う光景を思い浮かべた瞬間、体温が急上昇し、顔がポツポツと火照りだした。

(どうしよう。なんて答えたらいよいよだよね)

美少女の恥じらう様子を見た限り、覗き見の件に関しては、それほど怒っていないように思える。

もちろん、「じゃ、将来、結婚しようか」などと、軽口を返せるはずもなかった。

この十年のあいだ、互いにどんな人間へと成長したのか。

何も知らないうえに、後妻の孫とはいえ、彼女とは血の繋がったイトコ同士でもあるのだ。

ひたすらうろたえるなか、留美は振り向きざま、不安げな視線を注いできた。

澄んだ美しい瞳、ぷっくりとした涙堂、桜桃のような唇。

絶世の美少女ぶりに、心臓が激しい鼓動を打ちだす。

(や、やっぱり、かわいすぎるよ)

しばし見惚れていた慎也は、無意識のうちに本音を呟いた。

「け、結婚……したい」

あっと思ったものの、もはやあとの祭り。留美の耳には、はっきりと届いてしまったようだ。

「で、でも、今すぐにはできないけど……」

その場しのぎの言葉をジョークと受け取ったのか、少女はこぼれるような笑みを見せた。

緊張がほぐれ、ようやく二人のあいだに和やかな雰囲気漂う。

(よかった……ようやく笑ってくれたよ)

その後、二人は池のほとりに座り、これまで歩んできた人生と近況を語り合った。

留美は町の高校にバスで通い、驚いたことに水球部に所属しているらしい。

東京の女子高生なら、彼女は間違いなく文化系のタイプだ。

同じ高校生でも、やはり都会と田舎では感覚が違うのかもしれない。

(そう言えば、服を着ているとほっそり見えるけど、胸や腰のあたりは肉づきがよくったもんな。きつと、水球をしているからなんだ)

美少女の全裸を思いだすと、下腹部がモヤモヤしてくる。

留美は決して背は高くなかったが、顔が小さく、腰の位置がやたら高い。

八頭身の肉体はバランスがとてもよく、男の目を惹きつける魅力に満ち溢れていた。おそらく学校でも、男子生徒たちの視線を一身に浴びているのだろう。

急に不安を覚えた慎也は、恐る恐る問いかけた。

「あの……今、つき合っている人とかはいるの？」

たとえ処女とはいえ、交際の男がいらないとは限らない。

これだけの美少女なら、キスぐらいは経験しているのではないか。

緊張の面持ちで待ち受けていると、留美はあっけらかんとした表情で答えた。

「そんな人いないよ。だって……私の通っている学校って、女子校だし」

「え？ 女子校なの？」

「うん。だから男の子との出会いもないの」

美少女は、おそらく異性との交際経験もないのだろう。

（お、俺が、は、初めての人になる可能性もあるわけだ）

股間に血液が集中しはじめた直後、腕時計に目を走らせた留美は、慌てて立ちあがった。

「いけない！ 午後から、部活の練習があるんだ。私、もう行かないと」

「部活かあ。もっと話をしたかったけど、仕方ないね」

慎也が残念そうな顔をするなか、留美はすぐさま立ちあがり、スカートについた草を手で払った。

「慎也君はどうする？」

「うん……俺は子供の頃の記憶を頼りに、このあたりを散歩してみるよ」

「そう。あ、そうだ。明後日の日曜、神社で夏祭りがあるの。いっしょに行こうよ」

「夏祭りかあ」

世名木村の住人たちや、村の雰囲気を知るには絶好の機会だ。

田舎の夏祭りがどんなものか、興味もある。

（それに……こんなかわいい女の子と二人きりで夏祭りなんて、わくわくするよ）

笑顔で頷くと、留美はまたもや頬を染め、小走りでも本宅へと戻っていった。

謝罪を済ませ、美少女との距離が一気に縮まったことで、高揚感が全身を満たしていく。

二日後の夏祭りに思いを巡らせた慎也は、胸を甘く疼かせた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**